

徒然に

岩佐 晴夫

(一) 五本指の靴下

五本指の靴下を履くようになってもう何年にもなる。最初はミズムシにいいというようなことだった。皮膚科のお医者さんによると、ミズムシ菌はいつも近くにいるように、一度治ったからもう安心とはいかないものらしいが、この手の靴下を履くようになってからミズムシに悩まされることもなくなった。足の指は手の指と違って、思うように動かすことが出来ないから、五本指の靴下を履くのは容易ではない。端のほうから一本ずつ丁寧に履いたと思っているのに、靴下の指のほうが残っているというような事態になることもしばしばだ。ばんたびこんなことが続くと、「オレの足の指は一体何本なのだ」というところまで行き着くから妙なものだ。

代わりに、一度も間違えることなく五本の指がすつと靴下に収まる時はまことに気分がいい。めったにそんなことはないのだが。

(二) 入れ歯

上のほうの歯が着脱式の総入れ歯に替わってから五年以上になる。最初から数えて今は三代目になっている。歯医者に行くとき「いい歯してますね」と言われるが、上は一〇本が入れ歯だ。元々の歯は八本に減っている勘定だ。歯周病とか歯槽膿漏とかのためだ。最初の治療は、夜友だちと横浜港の岸壁に行った時、誤って自転車のまま海に転落して歯を欠いたことによる。小学校五、六年のときだったように思う。その友だちに言わせれば、あつという間もなく、ブレーキも踏まずに海に突っ込んだという。暗くて前が見えなかったせいである。目は左目が弱視で使い物にならず、右目だけで暮らしているからときにこういうことも起きる。

入れ歯には金具がついていて歯に掛けて固定するのだが、針金の先が少し空いていて、うっかり触ると指に食い込んで思わぬ怪我をすることがある。着脱の動作のときはそれほど心配はないが、水道水で勢いよく洗っている時など、つい入れ歯に食いつかれてしまう。入れ歯に咬まれた格好で、洒落にもならない。

(三)合評会

二月二四日(二〇一七年)は『みなせ』七三号の合評会だった。会場は小田原駅前「ふじ丸」。幹事は宇佐美在住の下田さん。最近では多いほうの七名が参加して定刻の一時から和やかに行われた。ふじ丸は魚介類が新鮮で低廉なお店と見受けた。会費三〇〇〇円で食事と酒が賄える由。三時には店が閉まるということまで近くの喫茶店に座を移ししばらく談笑して、五時に散会した。五時から二時間、岡森・鈴木・篠崎・岩佐の有志四人がカラオケへ。四人はカラオケ大好き人間で、皆、それぞれ上手なレパートリーを持っている。七時に切り上げて帰路についた。本厚木ミロードで多少の買い物をしてバスに乗ったから、帰宅はほぼ八時。

「随分早かったのね。一〇時一一時になるかと思っていたわ」ここまでは普通の会話。

「ミロードでちよっと買い物をした。タイマーの電池を替えたりして二〇〇〇円ほどだ」

「何を買ったか」

「ちよっとしたものだ」

「お肉を買ったりして、ちよっとじゃないじゃない」

「肉といつてもいつものブタバラ肉の薄切り。特に特別なものじゃない。ちよっとさ」

「随分不機嫌なのね。気の合った人たちともっと遅くまで一緒にいたらよかったじゃない」

カミさんは本気でそう思っているわけではない。嫌みたっぷり何か言わなければと焼き餅を焼いているのだ。合評会でのやりとりがどんなものか、皆目見当もつかない上、参加者に女性が何人もいるというだけで、無用の気が揉めるのだから、こちらはやっていられない。

「不機嫌だというけれど、初めからボクが不機嫌なのじゃない。不機嫌にさせているのはあんたの言葉遣いや態度じゃないか」

合評会から帰るといつもこうなるわけではないが、カラオケを楽しんできたなどと言おうものなら、どんなことになるか知れたものじゃないのだ。

(四)いろは歌

一〇世紀から一一世紀にかけて仮名の字母表があれこれと創られるようになった中で、いろは歌が弘法大師の作であるという伝説により大きな権威を保つよう

になった。いろは歌に先行する字母表の一つにあめつちの詞というのがあることを最近知った。

『あめ(天)つち(地)ほし(星)そら(空)やま(山)かは(川)みね(峰)たに(谷)くも(雲)きり(霧)むろ(室)こけ(苔)ひと(人)いぬ(犬)うへ(上)すゑ(末)ゆわ(硫黄)さる(猿)おふせよ(生ふせよ) えのエを(榎の枝を)なれみて(馴れ居て)』(四八文字)

同じようにたぬにの歌というのものもある由。

『大為爾伊天(田居に出で)奈徒武和礼遠曾(菜摘むわれをぞ)支美女須土(君召すと)安佐利於比由久(あさり追い行く)也末之呂乃(山城の)宇知恵倍留古良(打ち酔へる子ら)毛波保世与(藻葉乾せよ)衣不禰加計奴(得船繋けぬ)』(四七字)

なお、広辞苑によればいろは歌は次のとおり。

『色は匂へど散りぬるを我が世誰ぞ常ならむ有為の奥山今日越えて浅き夢見し酔ひもせず』

弘法大師の作と信じられていたが、実はその死後、平安中期の作、とある。

(五)賢兄愚弟

「内包」と「外延」ということがある。哲学用語だそ

うであるが、ボクにはよく判らない。広辞苑によれば、内包とは、概念の適用される範囲(外延)に属する諸事物が共通に有する徴表(性質)の全体。形式論理学上は、内包と外延とは反対の方向に増減する。例えば、学者という概念は、哲学者・文学者・科学者・経済学者などの学者の全種類を包括するが、学者という概念に「哲学研究」という徴表を加えると、内包はそれだけ増加し、外延は反対に減少する、とある。また、外延とは、ある概念の適用されるべき事物の範囲。例えば、金属という概念の外延は金・銀・銅・鉄などである、とある。

日常の会話では概念に拘わるわけではなく、内包を外から見えにくい人の性格・気持ち・考えなどとし、外延は年齢・性別・身長など、外から見える属性とするのが普通である。

内包外延とは別に、賢兄愚弟ということがある。無論言葉としては愚兄賢弟ということもあるが、いずれにしても、賢い兄と愚かな弟というような対比において、賢いも愚かも、外から見える形で言及されることが多いように思われる。

学業成績・学歴・職業・役職など、本来比較できないはずの属性を比較して賢兄愚弟を言うのだ。

ボクには六歳違いの弟がいるが、外延的には文字通り賢兄愚弟の関係にあると外見に見えるだろう。世間がそういう見方に傾くのはやむを得ないことかもしれないが、問題は弟自身が賢兄愚弟を意識することだ。あくまで外見的に、賢く見える兄を弟が憧れて、自分もそうなりたいと思うのは普通かもしれないが、ボクの弟はその憧憬感が強すぎたように思う。「兄を抜こう」弟は絶えずそう思っただけで焦燥した。兄を意識するあまり、普段は兄を遠ざける。製薬会社に就職して地方勤務になることもしばしばだったが、どこに転勤した、というようなことを一言も言わない。ほとんど風の便りで、釧路にいる、とか、福岡だ、ということが判る。兄もまた、弟が今どこかを問わない。必要があれば自ずと情報が入るはずだと思っただけだ。親は早くに家を出た兄に見切りをつけて、弟を頼りにしようとする。弟が独り身のときは、親を見てもいいという素振りを周囲に見せるが、家庭を持つようになれば弟の一存とはいかない。結局は、親の面倒を見るのは長男の務め、などという過去の時代の因習に従うほかはない。兄から見れば、弟は逃げ回っているふうに見える。親の葬式は一緒にやったが、終わればまた元の状態に戻る。

この弟が最近亡くなった。七三歳だった。一〇年ほど前から間質性肺炎という指定難病に罹っていた。肺胞が次々潰れて復元することのない病気で、いずれ呼吸が出来なくなるが、いつそうなるか予測がつかないという病である。

弟は幼少期に重い小児喘息で苦しむ日々を過ごした。もちろん医者にも診せたがはかばかしく治ることもなく、挙げ句は親に強いられて毎日のように称名を唱えたものだ。

「オンアヴォキヤ ベイロシヤノ マカホダラ マニ
ハンドマ ジンバラ ハラバリタヤン」仏壇に向かって唱える称名はいつかボクも記憶するようになった。小児喘息の体質が間質性肺炎を呼び込むことになったかと疑問を呈すると、弟の遺児Aちゃんのはっきり「そういうことではありません」とその関連を否定した。これを聞いてちよつと気が楽になったような感じがした。

知り合いのある僧侶にオンアヴォキヤの称名を毎日のように唱えたが病は軽快することがなかった旨を話したところ、僧侶は即座に、それは唱え方が足りなかったせいだ、と言った。

弟の訃報に接した時不思議に悲しみは感じなかった。

日頃のつきあいが薄いせいかもしれないが、その代わり、しばらく、身体の一部がもぎ取られるような錯覚に襲われた。

五月に入ると、退職校長会有朋会の総会資料があれこれ送られてくるが、とりわけ物故者名簿が重い。最近では近親者だけの葬儀が流行っているとか、この名簿によって、初めて他界したことを知るケースも多くなつた、ああ、あの人も亡くなつたか、おや、この人もそれぞれ生前の一コマ一コマが蘇ってくる。シンとする思いがある。他界を知れば、お線香の一つもあげねばなるまいか、まさか、知らん顔を決め込むことも出来まい、という件になるのだ。

(六) 一服の茶

カミさんが腹部大動脈瘤の手術を受けて八ヶ月ほどになる。手術は二〇一六年八月、今は二〇一七年四月である。手術以前から包丁を持たなくなつたため、ボクが厨房に立って一年の余が過ぎた。カミさんの朝が早くないから助かっている。七時頃から準備に入れば朝飯の支度は十分間に合うのだ。飯を炊くことにしてあれば、朝六時以前には米は研いであるから、電気釜

のスイッチを押すだけでいい。

まず、湯を沸かすことから始める。湯が沸くまでの間に、洗いかごの食器を所定の場所に収める。湯が沸けば茶を一服喫する。これが美味しい。茶葉は安物だ。せいぜい一〇〇グラム一〇〇〇円。二〇〇グラム五〇〇円などの特売品を買うこともある。茶葉は安物だが、手順通りの朝飯の支度の中で独り飲む一杯のお茶の味は格別だ。

(七) 兄貴代わり

弟の道夫君が亡くなったのは四月八日(二〇一七年)のことだが、生前兄のボクに替わって兄貴代わりの交情を続けてくれた友人がいる。元横浜YMCA少年部に属した天野・中田・萩原・成瀬という面々で、少年部のときはピジョンというグループを形成していた。細かく言えばピジョンは成瀬以外の三人で道夫君とは二歳違い、成瀬は一歳違いで別のグループだった。ピジョンの皆さんはボクと四歳違いで、彼らが中学三年生のときから高校卒業までの四年間、ボクはピジョンのレイリーダーを務めた。代々少年部では中学一年

徒然に

から高校三年までがメンバーで学年ごとにグループを構成する。大学へ進学するとレイリーダーとなつてメンバーの面倒を見る仕組みである。

メンバーのときは一〇人ほどの会員がいるのだが、学年の進行とともに会員が減つていき、高校卒業時には二、三人になつてしまふのが常で、中には卒業以前にメンバーのいなくなるグループもあつた。ボク自身は中学二年の秋に学校の友人に勧められて少年部に入り、高校卒業までずっとメンバーだつた。最初の頃は同じ学年のメンバーが多くて、二つのグループに分けるほどだったが、最後はほとんどボクだけになつた。大学に入つてから四年間レイリーダーとなつてグループのレイリーダーを務めたのは前述したとおりである。ボクのレイリーダー仲間はずと一年先輩

の近藤・金子・関本という面々である。

弟の道夫君がピジョンの皆さんや成瀬さんと友人つきあいをしたのは彼らが皆、学生の頃少年部のレイリーダーを務めたからに他ならない。友人関係は社会人になつてからもずっと続いた。

道夫君は彼なりの事情や主張があつて、自身の葬儀告別式は一切行わなかつた。生前の兄貴代わりの皆さんにも義理を欠いたので、ボクはボクの一存で、天

野・中田・萩原・成瀬の皆さんにささやかな酒席を設けて道夫君を偲んだ。五月二〇日のことである。

ところが驚いたことに、その一〇日も経たないうち、五月二十九日に萩原克爾さんが亡くなつたという知らせが届いたのだ。お得意のゴルフに興じている時心筋梗塞の奇禍に遭つたということだつた。

あの酒席は萩原の送別会になつたのか、天の配剤とどうか、感慨深いものがある。そう言えば、いつもはもう一軒、といつて皆を誘う萩原さんが何も言わずにあの席だけでお開きにしたのだった。葬儀委員長の話では、萩原さんは「いつ死んでも悔いはない」と言つていたとのこと、妙に心に残る紹介だつた。

心から冥福を祈る。

(八) 天の配剤

台所の換気扇は三月・六月・九月というように三ヶ月に一回掃除することになっている。我が家では油ものの料理が多いせいとか、換気扇は結構汚れていることが多い。今年(二〇一七年)の六ヶ月はカミさんが重傷のギックリ腰に見舞われて、換気扇の掃除を忘れていたことを思い出したのは七月一〇日のことだつた。

掃除に取りかかってみると、案の定、前面のカバー的網戸がいつも以上に汚れていて辟易する思いだった。これを含めて奥の換気扇まで一通りの掃除が終わり、最後の留めネジを締めようとした時、これが手許から外れてガスレンジの底まで落ちてしまった。この留めネジは小さくて扱いにくいからしばしば落ちてしまうこととなる。

やむなくガスレンジを少し持ち上げてネジを拾ったのだが、これを機にガスレンジをずらしてみると、一面がひどい汚れであることが判った。このまま放置することはできない相談で、改めてガス台を取り外し、全面の汚れを拭き取る作業にかかるといった。汚れ合いに汚れていたもので、この掃除は換気扇以上の手間と時間がかかった。

留めネジがすんなり締まっていれば、ガスレンジの下の掃除にまで手の及ぶことになるわけもないから、留めネジのこぼれはまさに天の配剤というべき出来事となった。

今年の言語学科ミニOB会は前年からの計画に従って新潟開催となった。新潟ならば鶴岡在住の伊藤正之氏の参加を見込むことが出来ると思われたからだった。会場は公立学校共済の新潟会館、期日は六月二六日

(月)・二七日(火)。

当初一二名ほどのメンバーに呼びかけたのだが、新潟は遠すぎるという理由で大阪・兵庫の会員から不参加の意向が表明されたりして、結局、在京幹事団の三人と地元の土屋氏の参加ということになった。肝心の伊藤氏はずっと参加の態勢できたのだが、期日の一週間ほど前になって、農作業中足を傷めて動きが取れなくなったという連絡があつて、不参加に終わったのだ。カミさんがひどいギックリ腰に見舞われたのが六月二八日のことだったから、もしこれが二日早く起きていればボクの新潟行きはおしゃかになるところだった。発病後のカミさんは一週間、自前でトイレに行くことも出来ない状態だったから、ボクが新潟へ行くことが出来たのも天の配剤と言える事態だった。

(九) 中年と高年と

いつも利用するスーパーストアのレジ係は素敵な女性が揃っている。若い人が多いのだが、若すぎてもう一つ馴染めない中に中年と覚しい魅力的な方がいる。

何気なく中年と書いたが、一体いくつぐらいを中年というのか広辞苑を引いてみてちよつと驚いた。広辞

徒然に

苑には「青年と老年の中間の年頃。四〇歳前後」と記されていて、漠然と五〇歳前後だと思っていたボクの認識とずれている。念のため角川書店の国語辞典を参照してみると「青年と老年の中間の年頃。四〇歳から五〇歳ごろ」とあって、少しボクの認識に近いことが判った。

「中年」に触発されて、その周辺を調べてみた。「壮年」は働き盛り、とあるだけで、年齢についての記述はない。「熟年」は記載がないかと思っていたが、案に相違して記述はあるが、円熟した年齢。中高年、とあって、いくつぐらいかの記述はない。その「中高年」は、中年と高年。青年期を過ぎて老年期に至る間の年頃、となっていて、やはりいくつぐらいかの示唆はない。

「初老」は四〇歳の異称。老境にさしかかった年代、とあり、人生五〇年といわれた時代を彷彿させる。「老年」は年をとり、老いること、と説明されるばかりだ。

老いには個人差もあるから、一概に年齢でいくつという仕切りは馴染まないのかもしれないが、それにしても、いずれもが漠然としていることに驚かされる。

件の中年レジ係。五、六あるレジ台を一瞥して、姿

が見えるとホツとして、それからゆっくり買物に取りかかる。姿が見えない時はちよつとがっかりして、買物物を控えることもあるから、レジ係が売上高を左右することもあるに違いないと思われる。

(一〇)たかが寝違え

今年(二〇一七年)九月二八日のこと、朝目覚めると、首筋に軽い痛みを覚えた。いわゆる寝違えである。毎年一〇月三日は退職校長同期の会・一二三会の会合がある。ボクは昨年から三年間幹事を務めることになっているので、普段なら自然な回復を待つところなのだが、念のためと思つて整形外科へ出向いた。頸部のレントゲンを撮ると担当医は、「普通にいう寝違えですね。特に重篤な異常はありません」と言い、マッサージを受けることになりました。以前、ギックリ腰に見舞われた時もマッサージを受けて役だったことを思い出して施術を受けることにした。

マッサージを受けている間はコリのほぐれていくのが判つて心地よかつたが、帰宅してから頸部の痛みが施術前よりひどくなっているのに気がついた。翌日になつても軽快しないのでまたマッサージを受けに行つ

た。この日も前日と同じで、施術を受けている間はそれなりに心地よいのだが、帰ってくる痛みは和らぐどころかよりひどくなった。三〇日は土曜日で医者は開いていたが通院は見送ることにした。一日は日曜日だから医者へ行く当てもなく、ほとんど一日中横になっていた。この間、首が頭を支えるのに苦労しているようで、布団から頭を起すのに四苦八苦だった。首の痛みはほとんどよくなりままだ。

二日の月曜日になると、首の痛みはかなり軽快してこれなら一二三会当日はすっかり回復するだろうと思えた。

こうして三日を迎えたが、首は思ったほどよくなってはいなかった。四日になっても首はまだ痛みがあり、ひどく凝っているようである。今回はマッサージが却って患部を悪化させていることは明らかかなようだ。

一二三会は参加者が減って一一名となったが、参加者は皆元気がいい。不参加者の中にはこれ以後知らせはいらぬという意向も目立つようになった。いつまで会を続けるか、この次には何か提案しなければならぬことになるのだろうか。

(一一) 茹でる、茹でる

「玉子を茹でる」というときは「ゆでる」とも「うでる」ともいうように思う。

「うでるような暑さ」という場合は「ゆでるような」とは言わないように思う。「ゆでる・ゆでる」「うでる・うでる」はどれもあると思うが、広辞苑などの記述からは、「ゆでる・ゆでる」が本筋で、「うでる・うでる」は亜流であるように見える。

同じような関係のありそうな「言う」の場合、

「いう」が本流で「ゆう」が亜流であることが常識だろう。ただ、発音の点から見ると、「I・U」は少なくとも実際は「YU・U」のほうが多いのではないか。このことは「行く」についても同じような事情だと思われる。「行く」の本筋は「いく」であろうが、亜流の「ゆく」も同様に用いられるからだ。

小学校のときから成人に至るまでボクの終生の親友に「行生」という名のナイスガイがいた。二〇〇〇年四月に六二歳で亡くなったのだが、彼は「いくお」でなく、自他共に、「ゆきお」と読ませたことは確かだった。

この手の例として常に引き合いに出されるのは、景色の絶景・味の絶佳である。前者は「ぜっけい」後者は「ぜっか」と読む。「鼻腔」は普通、「びこう」であるが、医学用語では「びくう」と読む。俗に蓄膿症と言われる疾病は正式には副鼻腔炎で、「ふくびくうえん」となる次第。

「若気の至り」は、普通、「わかげのいたり」と読み、若さのあまり、血気にはやって思慮分別を失うこと、の意で用いられるが、同じ字で「わかぎのいたり」と読むと「年を取ってからもまだ若い気でいて過ちを冒すこと」の意で用いられると、その昔、母方の叔父に聞いたことがある。この叔父は学生の頃からいわゆる學術優等で通った人だから、あながち間違いだとは思わないが、手許の広辞苑を拾うと、「わかぎ」は「わかげ」に同じとしか書いていないのが物足りない。郷は「きよう」とも「こう」とも読まれるが、使い分けは結構難しい。「こう」は昔の行政区の単位として用いられることが多く、村をいくつかまとめた地区の意である。郷村(こうそん)とか近郷(きんこう)、郷士(こうし)などと使われる。白川郷は(しらかわこう)である。

「きよう」は「むら」「さと」「いなか」「ばしよ」「ふ

るさと」の意で、異郷(いきよう)とか、温泉郷(おんせんきよう)とか郷里(きょうり)、などと使われる。テレビの旅番組に出てくるキャスターが温泉郷を「おんせんこう」「おんせんこう」と読んで憚らないケースもあって、とても聞き苦しい思いで聞くことも多くなった。言葉の揺れともいうべき現象であるが、やむを得ないことなのであろう。

(一一)モノは順

一二月一七日の日曜日、上述した萩原さんの墓参に行った。グループ仲間から誘われたからだ。彼が亡くなって六ヶ月ほど経つ。墓は六浦霊園に新設されていた。京急六浦駅から徒歩で優に三〇分はかかった。霊園の送迎バスはあるのだが、時間が合わなかったため往復徒歩ということになった。墓参を済ませたボクたちは京急で横浜まで戻り、ささやかに偲ぶ会を持った。思い出話は無論萩原さんだけに留まらず、道夫君を含めて昔のボーイズのメンバーに広く及んだ。酒は最初生ビールで始まったが、すぐにそれぞれの好みに帰って清酒や焼酎となった。ボクはこのところ焼酎とか泡盛とかを選ぶことが多く、ここでも焼酎をオンザロッ

クで飲んだ。このメンバーに焼酎覚はボクだけで、オンザロックを六、七杯空けた。

これが契機となったのか、翌一八日になると、左足親指に違和感を覚え、一九日には内科医の門を叩く仕儀となった。また通風ですか、と医者は問い、血液検査を指示した。医者がまた、というのは、五月にも痛風で診てもらっているからだった。

検査の結果は二六日に知らされたが、医者は、開口一番、「肝臓も腎臓もよくありません、コレステロールや中性脂肪も高く、尿酸値は八・八です。糖尿病も放っては置けません。薬を飲みますか」と言い、続けて、ご飯も麺類もパンも減らして、おかずを食べなさい、でも揚げ物はいけません、というご託宣となった。酒のことは一言も言及がなかった。言うまでもないということだったのだろう。当分の間断酒ということになると、手許にある泡盛や焼酎の瓶の置き所がなくなる。それがちよつと寂しい。

この頃の医者は総じてまず検査である。検査結果が出ると、その数値を解説するのが医者務めだと思っている節がある。この程度のことなら、ベテランの看護師さんでも十分対応可能だろう。医者ならば、この検査結果の裏に隠れていることを見抜いて適切なアド

バイスを発して欲しいものだと思った。

(一二) テレビコマーシャル

テレビは大体決まった番組を見る程度だが、最近のコマーシャルが多く、かつ長くて辟易する。きちんと調べたわけではないが、以前よりずっと長い気がする。気の利いたものならそれなりにつきあえるが出来ないものは何ともいただけない。

どこのガス会社のものか知らないが、「今日ガス」で始まるものと「ウコンの力」というCMが出来の双璧だ。聞く度に不快感が増す。犬や猫を小道具に使うものも感心しない。近頃はブタを使うものもある。

中には意味のよく判らないCMもある。ユニークなキャラクターで人気のある財津一郎が語り手を務めるピアノのCMで、「ピアノ売ってちょうだい。みんなまあるく〇〇ピアノ。そのとおり」という簡単なCMなのだ。何が「そのとおり」なのか判らない。随分長いこと続いている。商品名を嫌と言うほど連呼するCMの中で、その連呼がさほど気にならないものもある。東急リバブルのCMは子役が上手いので救われている。

(一四) 老化現象

物忘れがひどくなった。記憶力が衰えたのだ。人やモノの名前がすぐ出てこないことが多くなった。言葉と言葉が表すモノとの間に必然性のないことが多いから、両者が結びつかないのは当然と言えば当然のことかもしれない。

(一五) 本音と建て前

本音と建て前の乖離ということがしばしば問題になる。政治の世界やメディアの世界ではこの扱い如何でひどいやけどを負うこともある。論争において、互いに建て前をぶつけながら本音を探ろうとしたりする。

「浮気」という場合、ことの性質上普通は本気のはずだが、もし、本気でなく建て前としての浮気ということがあるとすれば、さぞ面白い小説が書けるのではないか、と思う。まだ何の構想もないが、いずれそういう小説を手がけてみたいものだ。

世に「寝たきり老人」ということがあるが、我が家では、カミさんは「起きたきり老人である。洗面や手

洗いなど自分のことは自分でするが、洗濯物を畳む以外の家事はついぞやらない。いつ頃からそうなったか確かな記憶はないが、もう何年にもなる。それでも建て前は夫婦二人で家事を分担していることになるのがおかしい。